

旅は寛容を教える “Travel teaches toleration”



サブライチェーン委員長 奥ムロン名誉顧問
たていし ふみお
立石 文雄

この言葉は、私が日本を離れ、駐在員として

働いていた時代に座右の銘となったものである。

1975年にオムロンに入社後、シカゴ、トロ

ント、アムステルダムと足かけ13年海外駐在員

として勤務した。生来好奇心が旺盛な私は、赴

任先々で現地の人々とすぐに仲良くなり、地域

コミュニティの活動にも積極的に参加した。特

に思い出深いのがトロントで現地社員と一緒に

なって実現した「がん撲滅チャリティウォーク

ソン」である。このような現地の人々との交流

は私の駐在員生活に彩りをもたらししてくれた。

一方で、ビジネス環境は常に浮き沈みがあり、

現地法人の責任者となつてからは、本社経営方

針と現場との葛藤の中で、厳しい意思決定をし

なければならぬことも多々あった。

そんな時代を過ごす中で、いつしか「旅は寛

容を教える」という言葉が私に宿った。この言

葉は、イギリスの政治家ベンジャミン・デイズ

レーリが遺したもので、はやりの生成AIによ

ると、「旅を通じて他者や異文化への理解と受

容が深まる」という意味である。確かに私にと

つて13年の海外駐在生活は旅そのものであった。

旅の本質は未知なるものとの出会いであると考

たつもりである。

オムロンには、私の父であり創業者である立

石一真が1959年に制定した「われわれの働

きでわれわれの生活を向上し、よりよい社会

をつくりましょう」という社憲がある。私は2

013年の会長就任以来、この社憲の精神を引

き継ぐ「企業理念」をグローバルの社員に伝え

るべく、「企業理念ダイアログ」を続けてきた。

これまでに延べ2000人を超える社員と対話

をしてきたが、その講話の中でも「旅は寛容を

教える」に触れている。ダイアログに出席した

社員からは「この言葉に感銘を受けた」という

感想を多くいただく。100年以上も昔の言葉

が、現代社会の重要課題である「多様性と包摂

性」の大切さ

を示唆するの

だそうだ。

私はまだまだ

だ続く旅の中

で、この言葉

を胸に新たな

出会いを楽し

みにしている。



トロントでの「がん撲滅チャリティウォークソン」の様子。先頭を歩く筆者（1988年）